

第2節 ICT インフラ環境の変化

第1節で触れたとおり、我が国の ICT インフラは、国際的な比較においても世界最高水準に達している。これに加えて、平成 23 年には、「デジタル・ディバイド解消戦略会議」報告書（平成 20 年 6 月 24 日公表）を踏まえたデジタル・ディバイド解消に関するマスタープランである「デジタル・ディバイド解消戦略」により、東日本大震災で甚大な被害を受けた地域を除き、全国のブロードバンドインフラの整備がおおむね完了する。また、地上テレビ放送においては、平成 23 年 7 月 24 日に、岩手県、宮城県及び福島県を

除く地域において、アナログ放送が停波され、デジタル化が実現された。平成 13 年の『ブロードバンド元年』から始まり、10 年が経過した現在、我が国はデジタル化による多くの恩恵を享受できるようになった。

こうした節目に際して、我が国の ICT インフラがこれまでどのような進展を遂げてきたのか、改めて検討してみる。これまでの情報通信白書では、ICT インフラの国際比較、ICT インフラの普及状況等を整理してきたが、今回、過去約 10 年の時系列の普及状況を俯瞰することとする。

1 インターネットの普及

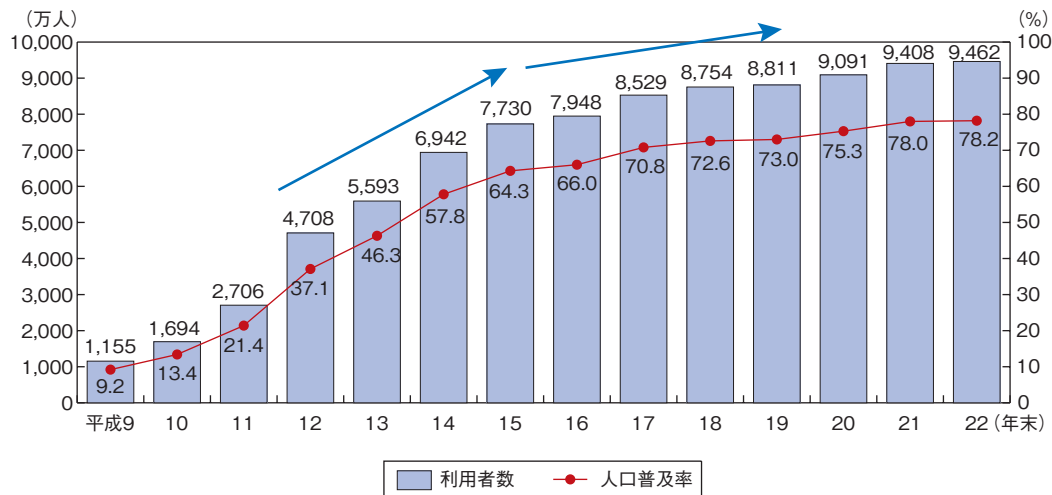
インターネットは、我が国では平成 5 年に商用サービスが開始され、利用者数は平成 9 年の 1,155 万人から、平成 22 年の 9,462 万人と 13 年間で 8.2 倍に拡大した。その拡大には、大きく 2 つの傾向があったことが図表 1-2-1-1 から読み取れる。平成 15 年までは前年比が 10% 以上の増加を続けているが、平成 15 年以降は前年比成長率が一桁台にとどまっている。

このような傾向から、平成 15 年までが成長期、平成 15 年以降が成熟期であったと考えることができる。

では、その間、どのように普及していったのだろうか。固定インターネット、特にブロードバンドインターネットと、携帯インターネットとの 2 つのインフラに着目し、みていくことにする。

図表 1-2-1-1 インターネットの普及率（全体の契約数）

平成15年までは前年比10%以上の伸び。その後、鈍化



（出典）総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」（平成 23 年）
（総務省「通信利用動向調査」により作成）

(1) ブロードバンドインターネットの普及

●平成13年のブロードバンド元年の後、DSLやFTTH、ケーブルインターネットなどのブロードバンドが拡大

平成13年版情報通信白書において、『ブロードバンド元年』と位置付けられて以降、その後10年間でブロードバンドは、どのように普及したのだろうか。

平成14年時点では、自宅のパソコンからインターネットにアクセスする方法として、70.6%がナローバンド回線¹を利用していたが、平成16年にナローバンド回線とブロードバンド回線²が逆転し、平成22年には77.9%がDSL、FTTHやケーブルインターネットなどのブロードバンド回線利用となった（図表1-2-1-2）。

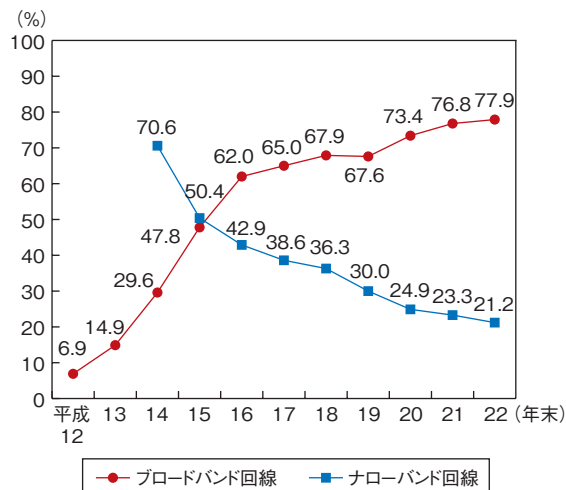
ア DSLの急増による成長

●低廉化・高速化が進み、平成12年の開始から3年で契約数が1,000万を超える急成長

DSLは平成12年から開始されたが、同年8月、アンバンドル³した加入者回線等の料金や接続の技術的条件に関するルール整備が行われたこともあり、平成13年からは、Yahoo!BBなど低廉な価格でDSLを提供する新規事業者が参入し、開始当初から提供していたNTT東日本も含めて、料金が低廉化していった（図表1-2-1-3）。また、その回線速度は平成14年に12Mbps、翌平成15年に20Mbpsを超え、平

図表 1-2-1-2 「自宅」で「パソコン」からインターネットを利用する際のアクセス方法の推移

ブロードバンド回線利用が増加し、平成16年に、ナローバンドとブロードバンドが逆転



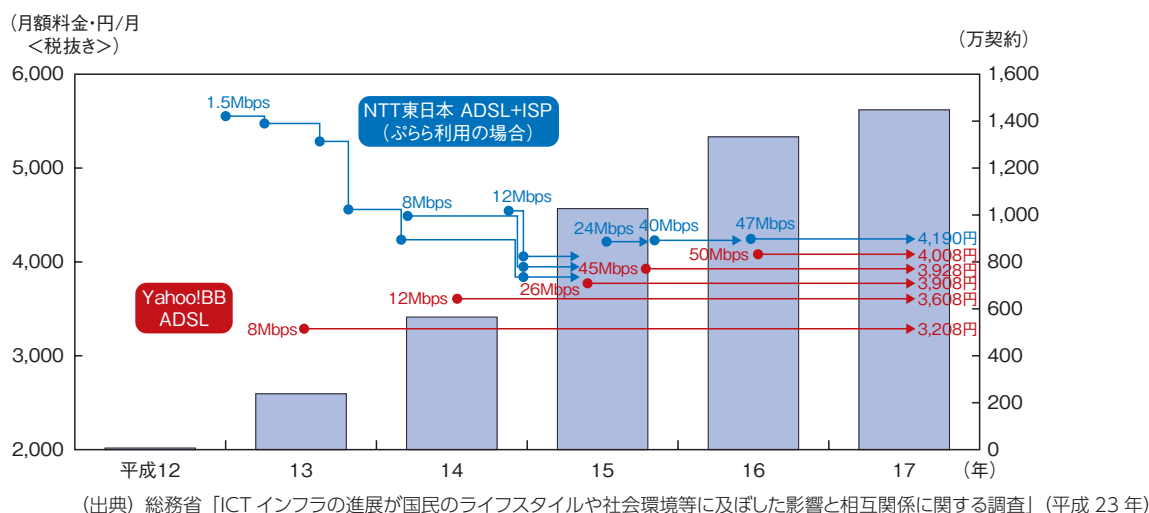
※ ナローバンド回線は平成14年より集計

（出典）総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」（平成23年）
（総務省「通信利用動向調査」により作成）

成16年には50Mbpsに達するなど、高速化と低廉化が進み、その契約数は急激に拡大、開始から3年後の平成15年には契約数が1,000万を超える成長を見せた。

図表 1-2-1-3 ブロードバンド（DSL）の契約数と料金の推移

DSLの提供料金は低廉化し、高速品目が追加され続けた



¹ 電話回線（ダイヤルアップ）、ISDN回線、携帯電話回線、PHS回線のいずれか

² 光回線（FTTH）、ケーブルテレビ回線（CATV回線）、DSL回線、第3世代携帯電話回線、固定無線回線（FWA）及びBWAアクセスサービスのいずれか

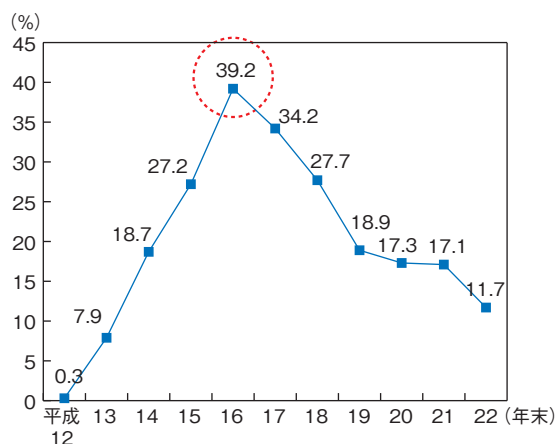
³ 第一種指定電気通信設備との接続に係る機能のうち、他の事業者が必要とするもののみを細分して使用できるようにすることをいう

●DSL がインターネットの拡大をけん引し、「自宅」で「パソコン」からインターネット利用する際、DSL を利用する世帯割合が増加

当時、インターネットはどのように利用されていたのだろうか。DSL が拡大していた平成 12 年から平成 16 年にかけて、「自宅」で「パソコン」からインターネット利用する際に DSL を利用する世帯の割合は増加傾向にあり、平成 16 年には 39.2% がインターネット接続に DSL を利用していた（図表 1-2-1-4）。このことから、平成 9 年から平成 15 年頃までの成長期における成長の要因として、DSL の拡大があったと考えられる。

図表 1-2-1-4 「自宅」で「パソコン」からインターネットを利用する際、DSL を利用する世帯の割合の推移

DSL を利用する割合は、平成 16 年の 39.2% を頂点に、減少している



(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)
(総務省「通信利用動向調査」により作成)

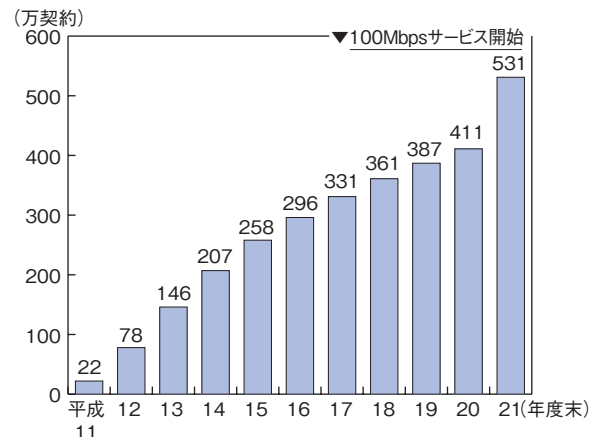
イ ケーブルインターネットの拡大

●ケーブルインターネットは継続して拡大し、高速化・大容量化も促進

インターネットの拡大においては、DSL とともにケーブルインターネットが拡大の大きな要素となっている。ケーブルインターネットは DSL より早い平成 8 年よりサービスを開始し、それ以降継続的に契約数を拡大、平成 21 年度末には 531 万契約に達した（図表 1-2-1-5）。その回線速度は、平成 17 年に JCOM により最大速度 100Mbps のサービスが提供開始になり、現在は、最大 160Mbps のサービスも提供されているなど、高速化・大容量化が進んでいる。

図表 1-2-1-5 ケーブルインターネット契約者数の推移

ケーブルインターネット契約者数は順調に増加し、平成 21 年度末では 531 万契約に達した



※ 平成 21 年度より一部事業者で集計方法が変更

(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

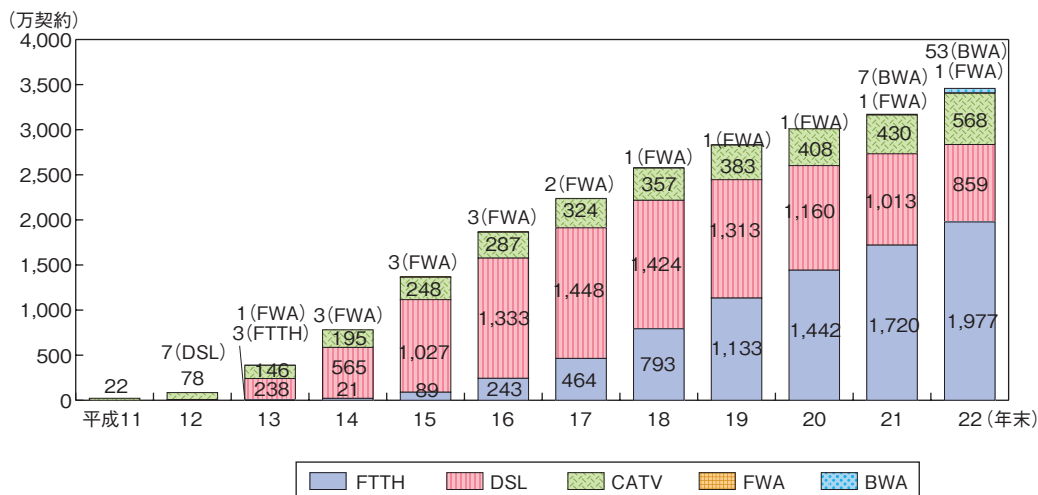
ウ FTTH の拡大と乗り換え

●インターネットの成熟期には、DSL から FTTH への乗り換えが加速

インターネットが成熟期に入ったと考えられる平成 15 年以降にはどのような動きがあったのだろうか。平成 13 年から本格的に提供開始した FTTH は、DSL よりも高速な通信が可能であり、開始以降増加し続けたものの、平成 13 年から平成 16 年までの間は、DSL の増加に遅れをとる状況（図表 1-2-1-6）であった。しかし、平成 17 年には最安価格が 2 千円台になるなど、サービス開始当初より価格の低廉化が進んだ（図表 1-2-1-7）こともあり、利用は継続して拡大し、平成 20 年には、平成 17 年以降減少傾向となっていた DSL の契約数を超えることとなった。この間、インターネットの普及率は急激な増加・減少なく、安定的に推移しており（図表 1-2-1-1）、FTTH の増加と DSL の減少の大きな影響は受けていない。このことから、インターネットの成熟期には、DSL から FTTH への乗り換えが進み、ブロードバンドの主流が FTTH へ移行していったと考えられる。

図表 1-2-1-6 ブロードバンド回線別の契約数の推移

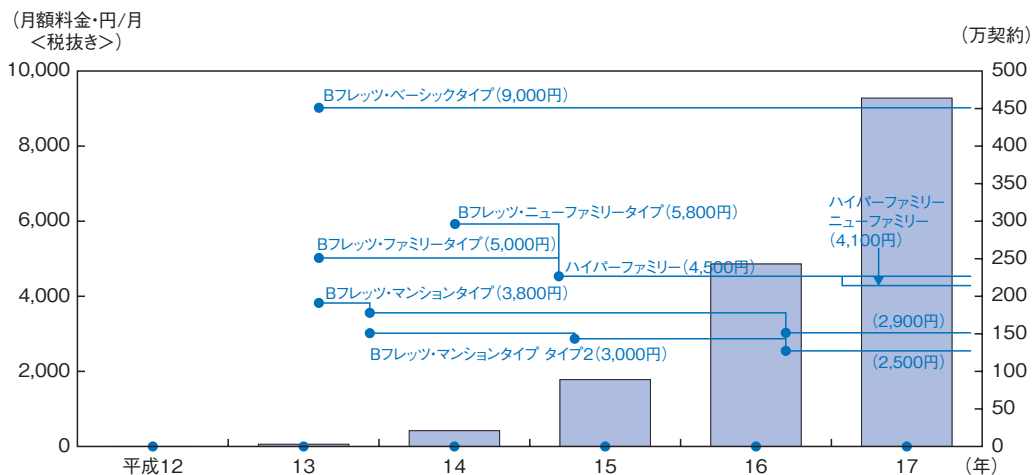
CATVとFTTHは継続して増加傾向。DSLは平成17年以降減少傾向に



(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)

図表 1-2-1-7 ブロードバンド（FTTH）の契約数と料金の推移

平成16年には最安価格が2千円台になるなど、価格の低廉化が進み、合わせて利用も拡大



※ 料金はNTT東日本のもの

(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)

エ ブロードバンドのリッチ化

●ブロードバンドはケーブルインターネット、DSLにより普及、FTTHにより高速化・大容量化し、動画投稿サイト等のリッチコンテンツの利用が促進

平成13年版情報通信白書で『ブロードバンド元年』を宣言した以降、ブロードバンドはケーブルインターネットやDSLにより大きく普及し、その後FTTHへの移行を通して、より高速化・大容量化、つまりリッチ化していった。

利用する機能・サービスにどのような差異が生まれるのか、平成22年通信利用動向調査より、ナローバンドとブロードバンドの比較（図表1-2-1-8）をした

ところ、デジタルコンテンツ（音楽・音声、映像、ゲームソフト等）の入手・聴取については、ナローバンドからは16.3%と利用が比較的少ないが、ブロードバンドになると、28.3%と利用が拡大していることがわかる。また、動画投稿サイトについても、ナローバンドの利用が少なく、ブロードバンドからだ利用が拡大する機能・サービスである。つまり、ブロードバンドのリッチ化により、インターネットを介して動画投稿サイトや音楽・音声、映像、ゲームソフト等の様々なデジタルコンテンツや情報にアクセスすることが容易にできる環境になったと考えられる。

図表 1-2-1-8 ナローバンド・ブロードバンド別、利用した機能・サービスと目的・用途の比較

「動画投稿サイトの利用」や「デジタルコンテンツの入手・聴取」については、ナローバンドとブロードバンドでの差が大きい

機能・サービス	ブロードバンド	ナローバンド	全体	ブロードバンドとナローバンドの差
商品・サービスの購入・取引	52.5%	36.8%	45.1%	15.7ポイント
デジタルコンテンツ(音楽・音声、映像、ゲームソフト等)の入手・聴取	28.3%	16.3%	23.6%	12.0ポイント
動画投稿サイトの利用	28.4%	17.0%	23.6%	11.4ポイント
地図情報提供サービス(有料・無料を問わない。乗換案内、ルート検索サービスも含む)	34.8%	26.2%	30.2%	8.6ポイント
インターネットオークション	17.7%	10.9%	14.8%	6.8ポイント
オンラインゲーム(ネットゲーム)への参加	9.7%	5.3%	8.0%	4.4ポイント
ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)への参加	7.1%	3.4%	5.8%	3.7ポイント
電子ファイルの交換・ダウンロード(P2P、FTPなど)	9.3%	5.7%	7.8%	3.6ポイント
マイクロブログの閲覧・投稿	4.5%	3.7%	3.8%	0.8ポイント

※複数回答あり

(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)
(総務省「通信利用動向調査」により作成)

10ポイント以上の差

(2) 携帯インターネットの普及

携帯インターネットにおいては、今から 10 年前の平成 13 年 10 月、我が国では世界に先駆けて第 3 世代携帯電話の本格提供が開始された。平成 11 年に開始された携帯インターネットの加入数(図表 1-2-1-9)は、この時点ですでに 4,000 万加入を突破していたが、その後も飛躍的な拡大を遂げ、今日、生活の必需品として、必要不可欠な存在となっている。ここからは、提供開始以降の携帯インターネットの推移から、携帯インターネットの普及が与えた影響について、みていくことにする。

●新たなビジネスモデルが誕生し、コンテンツが充実。

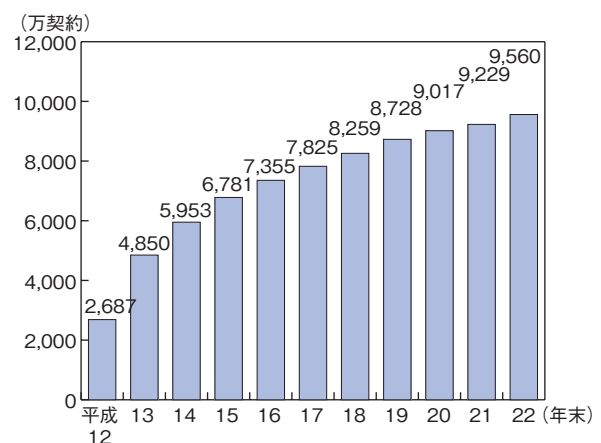
eメールの送受信などのサービスも拡充し、携帯インターネットが拡大

携帯電話からインターネットに接続する携帯 IP 接続サービスは、平成 11 年に NTT ドコモの i モードサービス及び現 KDDI の Ezweb サービス、平成 12 年には現ソフトバンクモバイルの J スカイサービスが開始され、携帯電話において電子メールの送受信や携帯向けインターネットサイトの閲覧ができるようになった。携帯向けインターネットサイトの閲覧が可能になったことで、気に入ったコンテンツや便利なサービスを提供するサイトのコンテンツプロバイダと契約し、毎月の会費を通話料と一緒に払う新たなビジネスモデルが誕生し、それをきっかけとして様々なコンテンツの提供が拡大されていった。また、平成 13 年には、現ソフトバンクモバイルより「写メール」が登場したことをきっかけに、平成 14 年には、携帯電話 3 大キャリアにおいて、メールによる画像送受信サービ

スが提供されるなど、サービスの拡充が進んだ。その結果、契約数は開始当初から急激に拡大し、平成 19 年までの間、前年比が 5%以上の成長を継続した(図表 1-2-1-9)。

図表 1-2-1-9 携帯 IP 接続サービス累計契約数の推移

開始から平成19年までの間、前年比5%以上の成長を継続



(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

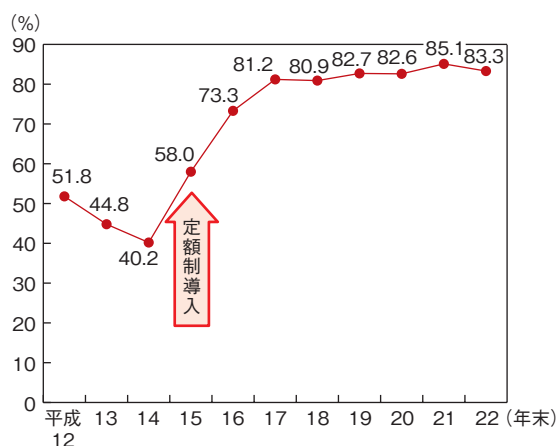
●携帯インターネットの急速な拡大により、インターネットのパーソナル化が進展

一方、インターネットを利用する際、携帯電話、PHS 及び携帯情報端末(PDA)等のモバイル端末を利用する人の割合の推移(図表 1-2-1-10)は、平成 14 年から平成 17 年にかけて急激に拡大している。これは、平成 15 年に携帯インターネットを対象としたパケット定額サービスが各社から提供され、料金を

気にすることなく、携帯インターネットが利用できるようになったことが大きな要因と考えられる。この時期のインターネット普及は成熟期に当たり、新たにインターネット利用を開始した人は多くはない。このことから、普段パソコンからインターネットを利用していた人が、携帯インターネットも利用するようになったことで、携帯インターネットが拡大したと考えることができる。つまり、自宅などの固定インターネットに限らずに、個人それぞれがインターネット接続できる環境が整ったという意味で、インターネットのパーソナル化が進んだと考えられる。

図表 1-2-1-10 インターネットを利用する際、モバイル端末を利用する人の割合の推移

モバイル端末でインターネットを利用する人は、平成14年40.2%から平成17年81.2%と3年間で倍増



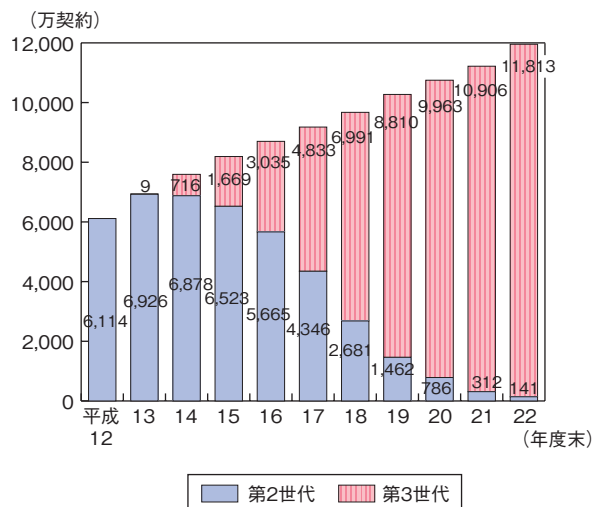
(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)
(総務省「通信利用動向調査」により作成)

●インターネットのパーソナル化だけでなく、携帯インターネット回線そのもののリッチ化も進展

インターネットのパーソナル化により、利用者はいつでもどこでも自分の好きなタイミングでインターネットに接続できる状態になったが、これに伴って利用形態の変化は起こったのであろうか。平成13年には、第2世代携帯電話に代わり、高速データ通信を実現する第3世代携帯電話が登場し、その後乗り換えが進み、平成22年度末時点で98.8%が第3世代携帯電話となっている(図表1-2-1-11)。その結果、インターネット接続のパーソナル化だけでなく、携帯インターネットそのものの高速化・大容量化(リッチ化)も進展した。

図表 1-2-1-11 第2世代・第3世代携帯電話の累計契約数の推移

平成13年に登場した第3世代携帯電話は、平成22年度末時点で98.8%に



(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)

●新たなビジネスモデルをベースに、パーソナル化とリッチ化のメリットを活かしたサービスが生まれ、利用が拡大

iモードやEzweb、Jスカイなどにより、新たなビジネスモデルをベースにしたコンテンツが拡大してきたが、携帯インターネットで利用した機能・サービスの目的・用途の推移(図表1-2-1-12)を見てみると、第3世代携帯電話が利用され始めた時期に新たな動きがあったことがわかる。平成16年と平成22年とを比較すると、「動画投稿サイト」「電子ファイルの交換・ダウンロード(P2P、FTPなど)」「地図情報提供サービス」といった新たなサービスが登場し、利用されるようになった。また、「商品・サービスの購入・取引」「メールマガジンの利用」「ソーシャルネットワーキングサービス」といった項目で利用者が増加している。この間、携帯電話インターネットにおいては、新たなビジネスモデルが誕生している。前述したように、携帯インターネット拡大はパーソナル化と、高速化・大容量化というリッチ化につながったが、近年、そのパーソナル化とリッチ化のメリットを活かした多種多様なサービスが生まれ、人々は、個々の必要に応じた適切なサービスを利用できるようになったと考えられる。

図表 1-2-1-12 携帯電話（PHS・PDA を含む）からインターネットで利用した機能・サービスと目的・用途の推移

「メールマガジンの利用」「商品・サービスの購入・取引」などの利用者が増加

機能・サービス	平成16年	平成22年	比較
電子メールの受発信	55.8%	52.8%	→
商品・サービスの購入・取引	7.3%	28.2%	↑
メールマガジンの利用 ※2	5.3%	17.7%	↑
地図情報提供サービスの利用 ※3	—	14.5%	NEW
動画投稿サイトの利用	—	7.6%	NEW
ソーシャルネットワーキングサービスの利用	0.3%	4.8%	↑
マイクロブログの閲覧・投稿	—	3.3%	NEW
電子ファイルの交換・ダウンロード(P2P、FTPなど)	—	2.2%	NEW

※1：複数回答あり

※2：有料・無料を問わない

※3：有料・無料を問わない。乗換案内、ルート検索サービスも含む

(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)
(総務省「通信利用動向調査」により作成)

2 電話サービスの変遷

インターネットの普及の変遷についてみてきたが、明治 23 年に東京—横浜で開始されて以降、120 年にわたり、広く利用されているコミュニケーション手段

である電話サービスはどのような変遷をしているのだろうか。

(1) 固定電話の減少

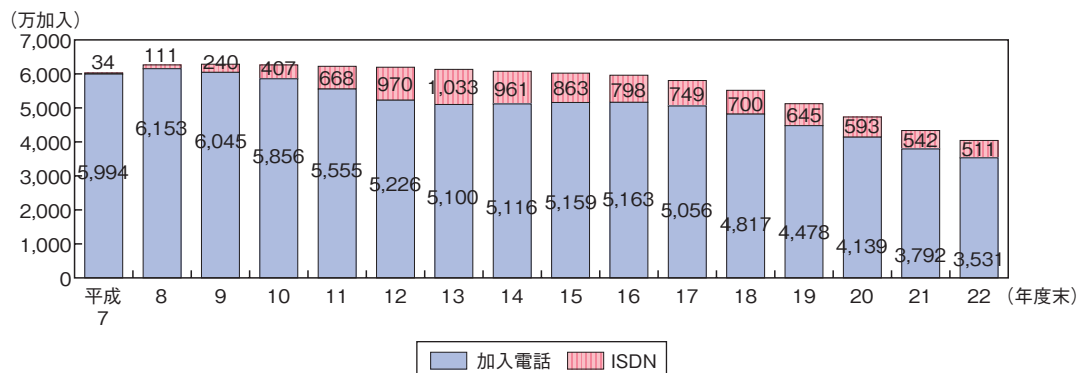
●平成 8 年まで増加傾向にあったが、その年をピークに翌年以降減少傾向

固定電話の加入者数の推移（図表 1-2-2-1）からみると、固定電話（加入電話）については、平成 8 年まで増加傾向にあったが、その年をピークに翌年以降

減少傾向となり、平成 21 年度末には 4,000 万契約を下回っている。また、ISDN も含めた固定電話全体の契約数でも平成 9 年をピークとして減少傾向となっている。

図表 1-2-2-1 固定電話の加入者数の推移

平成8年をピークに固定電話は減少傾向になり、平成21年に4,000万契約を下回った



(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

(2) IP 電話の開始

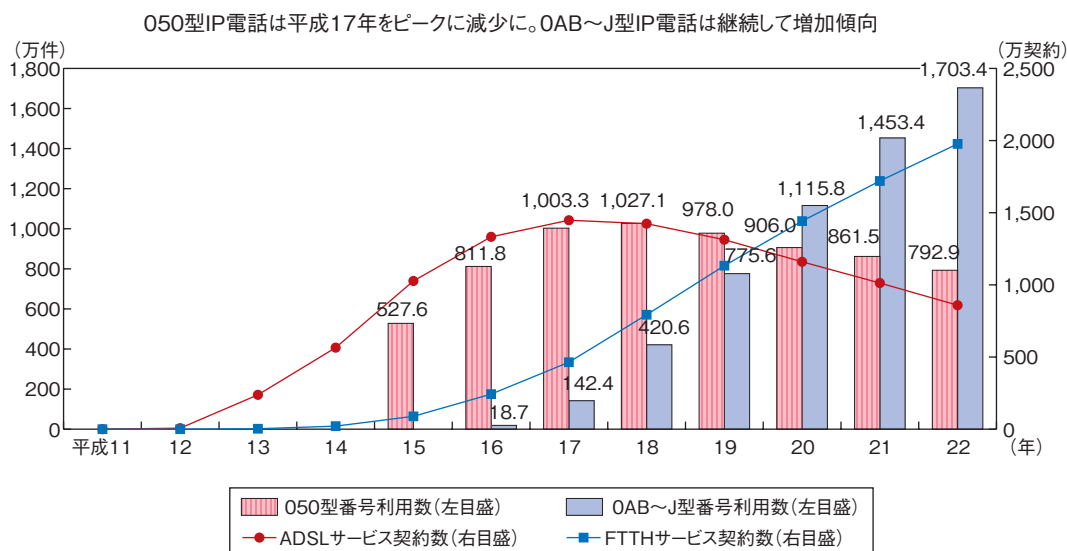
従来の回線交換とは異なる IP (Internet Protocol) の技術を応用した IP 電話の進展は、従来の回線交換型の電話（固定電話）に対して、どのような影響を及ぼしたのであるか。

●従来の固定電話と同様に緊急通報（110 番等）等への通話も可能な IP 電話が開始され、主に FTTH 契約者において利用が進展

IP 電話は平成 13 年に提供が開始され、その後、平成 14 年には 050 から始まる電話番号の IP 電話への付与が開始され、平成 17 年までの間、ブロードバン

ドの増加に伴い、主に DSL 利用者による IP 電話の契約が増加した（図表 1-2-2-2）。従来の固定電話と比べて通話料金が廉価であること⁴、一部の利用者同士では無料で通話ができることなどが増加の要因として考えられる。平成 17 年には、「0AB～J」から始まる電話番号⁵を利用し、従来の固定電話と同様に緊急通報（110 番・118 番・119 番）等への通話も可能な IP 電話が開始され、主に FTTH の契約者において利用が進み、平成 20 年には 1,000 万契約を超え、「050 型」IP 電話の契約者数を上回った。

図表 1-2-2-2 IP 電話の普及率とブロードバンドの普及率の推移

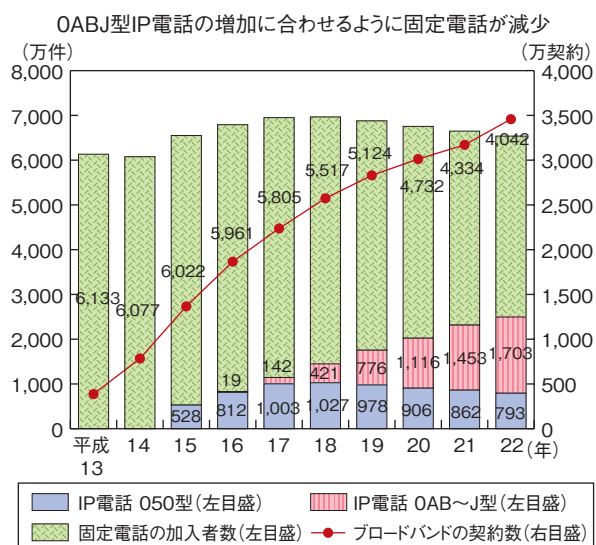


(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

●「050 型」には一定程度の新規需要、「0AB～J 型」IP 電話は固定電話からの乗り換えもあった

IP 電話の開始以降、固定電話の契約数はどのように変化しているだろうか。図表 1-2-2-3 から、IP 電話の開始以降も、両者を合わせると約 6,000 ～ 7,000 万契約で推移しているが、IP 電話を「050 型」と「0AB～J 型」に分けると、その傾向に違いがあることがわかる。「050 型」IP 電話の増加に伴い、全体数では、今までの減少傾向から増加傾向に転じており、一定程度の押し上げ効果があったと考えられる。一方、「0AB～J 型」IP 電話については、その増加に伴う全体数の増加傾向はみられなかった。さらに、平成 13 年から 16 年の間で平均 0.9% の減少傾向だったものが、平成 17 年から 21 年では平均 7.1% の減少傾向となるなど、「0ABJ 型」IP 電話開始以降には固定電話の減少傾向が強くなっている。IP 電話が固定電話に比

図表 1-2-2-3 IP 電話利用数・固定電話加入者数・ブロードバンド契約数の推移



(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

⁴ 平成 19 年版～平成 22 年版情報通信白書においては、IP 電話の需要が伸びてきた要因の一つとして、料金が安いことを挙げている

⁵ 03-xxxx-xxxx等の10桁で利用される番号

べて低価格であることに加え、FTTH 利用者であれば、容易に加入することができたため、一定程度、乗

り換えが起きたと考えられる。

(3) 携帯電話の増加

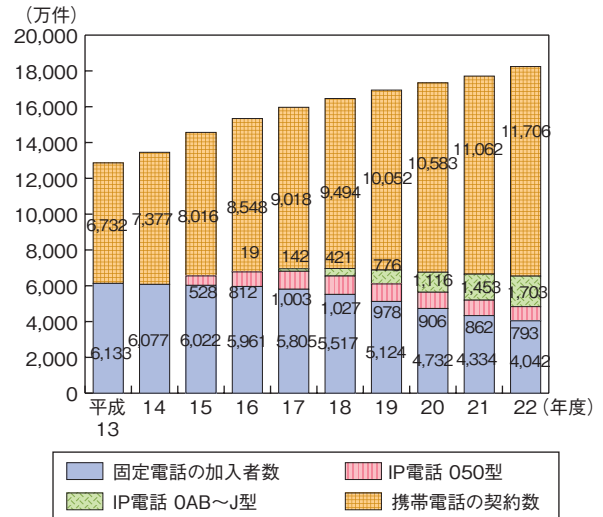
●一定程度、携帯電話へ乗り換えた利用者がいることが想定

固定電話の減少の要因として、「0AB～J型」IP 電話への乗り換え以外に、携帯電話による影響が考えられる。携帯電話契約数は提供開始以降継続的に増加傾向となっている。平成 17 年以降は、固定電話・IP 電話全体の契約数が停滞している状況となっているが、その間も、携帯電話の増加傾向は続いており、一定程度、携帯電話へ乗り換えた利用者がいると想定される（図表 1-2-2-4）。

図表 1-2-2-4

IP 電話利用数・固定電話加入者数・携帯電話加入者数の推移

IP 電話・固定電話が微減している中で、携帯電話は継続して増加傾向



(出典) 総務省「ICT インフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成 23 年)

3 デジタル放送の普及

ここまで、通信についてみてきたが、放送はどのように変化してきたのだろうか。

(1) 地上デジタル放送の普及

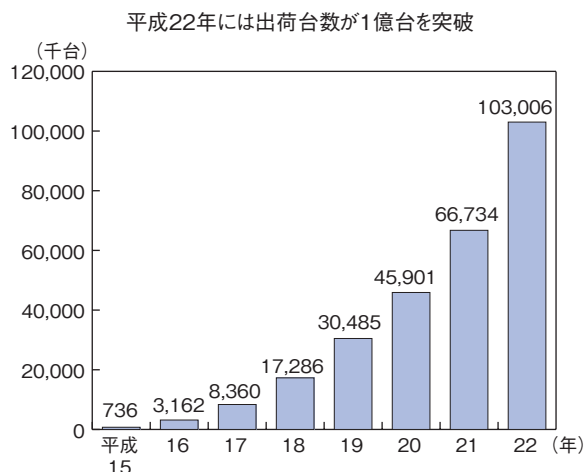
●デジタル化の進展による映像の進化やディスプレイの技術革新に伴い、テレビ画面サイズの大型化も進展

地上デジタル放送は、平成 15 年 12 月に関東・中京・近畿の三大都市圏において放送が開始され、その後、順次放送エリアが拡大され、平成 18 年 12 月には、全県庁所在地等で放送が開始された。平成 23 年 7 月 24 日には、東日本大震災による影響が大きかった、岩手・宮城及び福島県の 3 県を除き、地上テレビ放送の完全デジタル化を行った。また、放送エリア拡大と併せて、受信機についても普及が進み、平成 22 年に

は地上デジタル放送に対応した機器の普及が 1 億台に達した（図表 1-2-3-1）。

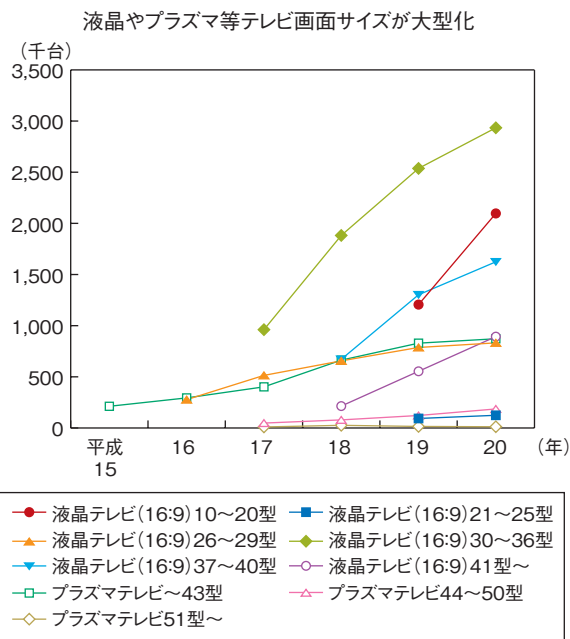
この地上テレビ放送のデジタル化により、放送番組として、ハイビジョンの高精細な映像が提供されるようになり、また、デバイス面でも、旧来のブラウン管に代わり、液晶やプラズマ等薄型ディスプレイの技術革新やインチ当たりの価格の低廉化が進んだこともあり、ソフト・ハードともに大型化する要素が揃った。このため、地上デジタル放送の進展に合わせるように、テレビ画面サイズの大型化がみられた（図表 1-2-3-2）。

図表 1-2-3-1 地上デジタル放送対応受信機の累計出荷台数の推移



(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)
(一般社団法人 電子情報技術産業協会「地上デジタルテレビ放送受信機国内出荷実績」により作成)

図表 1-2-3-2 テレビの画面サイズ別出荷台数の推移



(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)
(一般社団法人 電子情報技術産業協会「2010民生用電子機器国内出荷データ集」により作成)

(2) 多チャンネル放送の進展

●衛星放送、ケーブルテレビが拡大し、多様な映像から選択ができる環境が促進

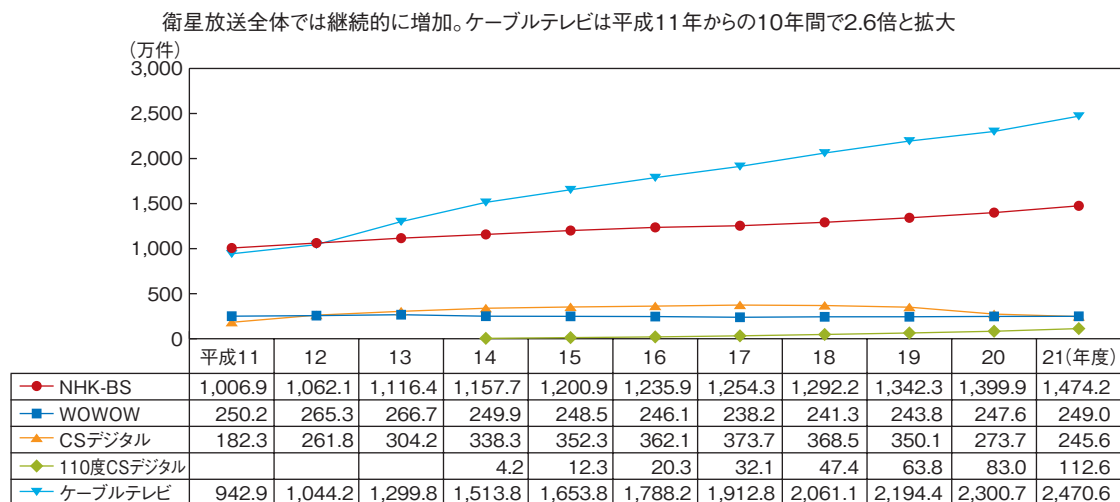
衛星放送は、平成8年に東経124/128度CSデジタル放送、平成12年にBSデジタル放送、そして平成14年に東経110度CSデジタル放送が開始される等、デジタル化が進展するとともに、多チャンネルメディアとして発展してきた。また、平成23年7月24日にはBSアナログ放送が終了し、デジタル放送に完全移行され、今後、これら新チャンネルを合わせた合計29チャンネルが全国で視聴可能となり、より一層多チャンネル放送の充実が見込まれる。平成21

年度の加入件数をみると、衛星放送の各サービスの加入件数は一部で減少傾向にあるものの、その他のサービスでは継続的に増加している。

また、ケーブルテレビは、平成21年度の加入世帯数は2,471万世帯となっており、平成11年からの10年間で2.6倍と、拡大を続けている(図表1-2-3-3)。

衛星放送やケーブルテレビ放送のような放送サービスの拡大により、複数のチャンネルから見たい映像を選択する多チャンネルの環境が広がってきていると考えられる。

図表 1-2-3-3 衛星放送・ケーブルテレビの契約数の推移



(出典) 総務省「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」(平成23年)

みんなでつくる情報通信白書コンテスト2011

一般の部 優秀賞受賞コラム

わたしと白黒メール～一生来て欲しくないメール～

執筆 いえき たけひさ 家城 武尚さん (看護師 愛知県名古屋市)

コメント：彼女に、一生来て欲しくないメールを送らせないために、自分への戒めとして書きました。

キラキラしたデコレーションメール。
時には文字が全く無い絵文字だけのメール。
ただしっかりと様々な気持ちが伝わるメール。
それは、僕の婚約者からのメール。

お互い看護師の僕達は、夜勤があるためにすれ違い生活を送っている。今日は僕が夜勤で彼女は日勤。明日は彼女が夜勤で僕は夜勤明けといった感じの無限ループが続く。そのためもあって、僕達の間では、メールのやり取りは欠かせないモノとなっている。

彼女のメールは、飛び出す絵本のようなデコレーションメール。時には眉を細めてしまう程、喜怒哀楽が1つのメールの中に込められている。結局今は、悲しいのか、嬉しいのか解らないほどに。そんな彼女からのメールが届くと、開く事さえ煩わしく感じるようになった。反して僕のメールは、大抵1行、長くて2行といった文字だけのメール。絵文字や顔文字を使用する事が嫌いな訳ではなく、自分の伝えたい事を、端的に表現する事が一番良いと考えていた。

久しぶりに一緒に休みの日、ランチでもしようと12時にいつもの駅で待ち合わせをしていた。時は3月。まだ冬の名残が肌を緊張させるような雨の日、僕は寝坊した。起床した時にはすでに、待ち合わせ時間より1時間過ぎていた。絶望的なまでの遅刻。すぐさま携帯を手に取った。

新着メール3件。全て彼女からのものだった。

最初の1件目は、「今日は楽しみで早起きしちゃった。ランチ何食べよう？久しぶりにオムライス屋さんでもいいね。」というキラキラしたいつものメール。

2件目は、待ち合わせ時間より15分経った時刻に送られたメール。「どうしたのー？電車遅れてる？？お腹すいちゃったよー。」というキラキラはしているが、いつもより、装飾が少ないメール。

3件目は、「もう1時間になります。連絡がないのは何ですか。あと5分したら帰ります。」

彼女から初めてもらった、白黒メール。それは、恐怖という感情まで一直線に辿り着かせ、ドクドクという心拍数が上昇した事を感じた。残念ながら、このままの状態では電話をかける勇気を僕は持ち合わせていない。

「すいません！！寝坊です。すぐに向かいます。」と打ったところで、彼女のご機嫌を取るために、デコレーションメールを作成しようと思いついた。これほど早くにデコレーションメールを作成したのは、これからも、これまでもないくらいの自己ベストだった。

彼女からの返信は、「デコメ作成するぐらいの余裕があるなら早く返事を下さい。そして早く準備をして下さい。」またもや白黒のメールだった。僕は、「すみません。」とだけ返事をして、待ち合わせ場所まで向かった。こっぴどく怒られたものの、デコレーションメールの作り方を教わることで、最後は仲直りをした。

そんな僕達も、今年の4月に入籍する事となる。今後は、彼女からの白黒メールが来ない事を祈りつつ、僕は彼女のいつものデコレーションメールを待っている。